

与謝野晶子訳

源氏物語 行幸卷



一冊堂青空文庫

源氏物語

行幸

紫式部

與謝野晶子訳

雪ちるや日よりかしこくめでたさも上

なき君の玉のおん興こし

（晶子）

源氏は玉鬘たまかざらに対してあらゆる好意を尽くしているのであるが、
人知れぬ恋を持つ点で、南の女王にょおうの想像したとおりの不幸な結末

を生むのではないかと見えた。すべてのことに形式を重んじる癖があつて、少しでもその点の不足したことは我慢のならぬように思う内大臣の性格であるから、思いやりもなしに媚として麗々しく扱われるようなことになつては今さら醜態で、氣恥ずかしいことであると、その懸念けねんがいささか源氏を躊躇ちゆうちゆうさせていた。

この十二月に洛西らくさいの大原野の行幸みゆきがあつて、だれも皆お行列の見物に出た。六条院からも夫人がたが車で拝見に行つた。帝みかどは午前六時に御出門になつて、朱雀すざく大路から五条通りを西へ折れてお進みになった。道路は見物車でうずまるほどである。行幸と申しても必ずしもこうではないのであるが、今日は親王がた、高官た

ちも皆特別に馬鞍ぐらを整えて、隨身、馬副男うまぞいおとこの背丈せたけまでもよりそろえ、装束に風流を尽くさせてあつた。左右の大臣、内大臣、納言以下はことごとく供奉ぐぶしたのである。浅葱あさぎの色の袍ほうに紅紫したかさねの下襲を殿上役人以下五位六位までも着ていた。時々少しずつの雪が空から散つて艶えんな趣を添えた。親王がた、高官たちも鷹使たかいのたしなみのある人は、野に出るからの用にきれいな狩衣かりぎぬを用意していた。左右の近衛このえ、左右の衛門えもん、左右の兵衛ひょうえに属した鷹匠たかじょうたちは大柄な、目だつ摺衣すりぎぬを着ていた。女の目には平生見馴なれない見物事であつたから、だれかれとなしに競つて拝観をしようとしたが、貧弱にできた車などは群衆に輪をこわされて哀れな姿で立ってい

た。桂川かつらの船橋のほとりが最もよい拝観場所で、よい車がここには多かった。六条院の玉鬘たまかざらの姫君も見物に出ていた。きれいな身なりをして化粧をした朝臣あそんたちをたくさん見たが、緋ひのお上着を召した端麗な鳳輦ほうれんの中の御姿みすがたになぞらえることのできるような人はだれもない。玉鬘は人知れず父の大臣に注意を払ったが、噂うわさどおりにはなやかな貫禄かんろくのある盛りの男とは見えだが、それも絶対なりっぱさとはいえるものでなくて、だれよりも優秀な人臣と見えるだけである。きれいであるとか、美男だとかいって、若い女房たちが蔭かげで大騒ぎをしている中將や少將、殿上役人のだれかれなどはまして目にもたたず無視せざるをえないのである。帝は源

氏の大臣にそっくりなお顔であるが、思ひなしか一段崇高な御美^び貌^うと拝されるのであつた。でこれを人間世界の最もすぐれた美と申さねばならないのである。貴族の男は皆きれいなものであるように玉鬘は源氏や中將を始終見て考えていたのであるが、こんな正装の姿は平生よりも悪く見えるのか、多数の朝臣たちは同じ目鼻を持つ顔とも玉鬘には見えなかつた。兵部卿^{ひやうぶきやう}の宮もおいでになつた。右大將は羽振りのよい重臣ではあるが今日の武官姿の纓^{えい}を巻いて胡^{やなぐい}※を負つた形などはきわめて優美に見えた。色が黒く、髭^{ひげ}の多い顔に玉鬘は好感を持てなかつた。男は化粧した女のような白い顔をしているものでないのに、若い玉鬘の心はそれを

軽蔑^{けいべつ}した。源氏はこのごろ玉鬘に宮仕えを勧めているのであつた。今までは自発的にお勤めを始めるのでもなしにやむをえずに御所の人々の中に混じって新しい苦勞を買うようなことはと躊躇する玉鬘であつたが、後宮の一人でなく公式の高等女官になつて陛下へお仕えするのはよいことであるかもしれないと思うようになった。大原野で鳳輦^{ほうれん}が停め^{とど}られ、高官たちは天幕の中で食事をしたり、正装を直衣^{のうし}や狩衣に改めたりしているころに、六条院の大臣から酒や菓子^のの献上品が届いた。源氏にも供奉^{ぐぶ}することを前に仰せられたのであるが、謹慎日であることによって御辞退をしたのである。蔵人^{くらうど}の左衛門尉^{さえもんのかみ}を御使^{みつか}いにして、木の枝に付けた雉^き

子^じを一羽源氏へ下された。この仰せのお言葉は女である筆者が採録申し上げて誤りでもあつてはならないから省く。

雪深きをしほの山に立つ雉子の古き跡をも今日^{けふ}はたづねよ

御製はこうであつた。これは太政大臣が野の行幸にお供申し上げた先例におよびになったことであるかもしれない。

源氏の大臣は御使いをかしこんで扱つた。お返事は、

小塩^{をしほ}山みゆき積もれる松原に今日ばかりなる跡やなからん

という歌であつたようである。筆者は覚え違いをしているかもしれない。

その翌日、源氏は西の対へ手紙を書いた。

昨日^{きのう}陛下をお拝みになりましたか。お話ししていたことはどう決めますか。

白い紙へ、簡単に気どつた跡もなく書かれているのであるが、美しいのをながめて、

「ひどいことを」

と玉鬘^{たまかざら}は笑っていたが、よくも心が見透かされたものであるという気がした。

昨日は、

うちきらし朝曇りせしみゆきにはさやかに空の光やは見し

何が何でございますやら私などには。

と書いて来た返事を紫の女王にょおうもいっしょに見た。源氏は宮仕え

を玉鬘ちゆめに勧めた話をした。

「中宮ちゆめが私の子になっておいでになるのだから、同じ家からそれ以上のことがなくて出て行くのをあの人は躊躇することだろうと思うし、大臣の子として出て行くのも女御にょごがいられるのだから不

都合だしと煩悶はんもんしているそのことも言っているのですよ。若い女で宮中へ出る資格のある者が陛下を拝見しては御所の勤仕を断念できるものでないはずだ」

と源氏が言うのと、

「いやなあなた。お美しいと拝見しても恋愛的に御奉公を考えるのは失礼すぎたことじゃありませんか」

と女王は笑った。

「そうでもない。あなただって拝見すれば陛下のおそばへ上がりますよ」

などと言いながら源氏はまた西の対へ書いた。

あかねさす光は空に曇らぬをなどてみゆきに目をきらしけん

ぜひ決心をなさるように。

こんなふうに言つて源氏は絶えず勧めていた。ともかくも裳着^{もぎ}の式を行なおうと思つて、その儀式の日の用意を始めさせた。自身ではたいしたことにしようとしないことでも、源氏の家で行なわれることは自然にたいそうなものになってしまうのであるが、今度のことはこれを機会に内大臣へほんとうのことを知らせようと期している式であつたから、きわめて華美な支度^{したく}になつてゐた。来春の二月にしようと源氏は思つていたのであつた。女は世

間から有名な人にされていても、まだ姫君である間は必ずしも親の姓氏を明らかに掲げている必要もないから、今までは藤原の内大臣の娘とも、源氏の娘とも明確にしないで済んだが、源氏の望むように宮仕えに出すことにすれば春日かすがの神の氏の子を奪うことになるし、ついに知れるはずのものをしいて当座だけ感情の上からごまかしをするのも自身の不名誉であると源氏は考えた。平凡な階級の人は安易に姓氏を変えたりもするが、内に流れた親子の血が人為的のことで絶えるものでないから、自然のままに自分の寛大さを大臣に知らしめようと源氏は決めて、裳もの紐ひもを結ぶ役を大臣へ依頼することにしたが、大臣は、去年の冬ごろから御病氣

をしておいでになる大宮が、いっとうおなりになるかもしれぬ場合であるから、祝儀のことに出るのは遠慮をすると辞退してきた。中將も夜昼三条の宮へ行つて付ききりのようにして御介抱かいほうをしていて、何の余裕も心にならないふうな時であるから、裳着は延ばしたものであろうかとも源氏は考えたが、宮がもしお薨かくれになれば玉鬢たまかづらは孫としての服喪の義務があるのを、知らぬ顔で置かせては罪の深いことにもなるうから、宮の御病氣を別問題として裳着を行ない、大臣へ真相を知らせることも宮の生きておいでになる間にしようと思ひ源氏は決心して、三条の宮をお見舞いしがてらにお訪たずねした。微行しのびとして来たのであるが行幸みゆきにひとしい威儀が知ら

ず知らず添っていた。美しさはいよいよ光が添ったようなこのごろの源氏を御覧になったことで宮は御病苦が取り去られた気持ちにおなりになって、きょうしやく脇息へおよりかかりになりながら、弱々しい調子ながらもよくお話しになった。

「そうお悪くはなかったのでございますね。中將がひどく御心配申し上げてお話をいたすものですから、どんなふうでいらっしゃるのかとお案じいたしておりました。御所などへも特別なことのない限りは出ませんで、朝廷の人のようでもなく引きこもっておりまして、自然思いましてもすぐに物事を実行する力もなくなりました。失礼をいたしました。年齢などは私よりもずっと上の人が

ひどく腰をかがめながらもお役を勤めているのが、昔も今もあるでしょうが、私は生理的にも精神的にも弱者ですから、怠^{なま}けることよりできないのでございましょう」

などと源氏は言っていた。

「年のせいだと思ひましてね。幾月かの間は身体^{からだ}の調子の悪いのも打ちやってあったのですが、今年になってからはどうやらこの病氣は重いという気がしてきましてね、もう一度こうしてあなたにお目にかかることもできないままになつてしまふのかと心細かったのですが、お見舞いくださいましたこの感激でまた少し命も延びる気がします。もう私は惜しい命では少しもありません。

皆に先だたれましたあとで、一人長く生き残っていることは他人のことで見てもおもしろくないことに思われたことなのですから、早くと先を急ぐ気にもなるのですが、中將がね、親切にね、想像もできないほどよくしてくれましてね、心配もしてくれそうです。のを見ますとまた引き止められる形にもなっております」

初めから終わりまで泣いてお言いになるそのお慄^{ふる}え声もこの場合^しに身に沁んで聞かれた。昔の話も出、現在のことも語っていた。ついでに源氏は言った。

「内大臣は毎日おいでになるでしょうが、私の伺っておりますうちにもしおいでになることがあればお目にかかれて結構だと思ひ

ます。ぜひお話ししておきたいこともあるのですが、何かの機会がなくてはそれできませんで、まだそのままになっております」

「お上^{かみ}の御用が多いのか、自身の愛が淡い^{うす}のか、そうそう見舞ってくれません。お話しになりたいとおっしゃるのはどんなことでしょうか。中將が恨めしがっていることもあるのですが、私は何も初めのことは知りませんが、冷淡な態度をあの子にとるのを見ていましてね、一度立った噂^{うわさ}はそんなことで取り返されるものではない、かえって二重に人から譏^{そし}らせるようなものだとは私は忠告もしましたが、昔からこうと思ったことは曲げられない性質でね、

私は不本意に傍観しています」

大宮が中將のことであろうとお解しになって、こうお言いになるのを聞いて、源氏は笑いながら、

「今さらしかたのないこととして許しておやりになるかと思いついて、私からもそれとなく希望を述べたこともあるのですが、断然お引き分けになろうとするお考えらしいのを見まして、なぜ口出しをしたかときまり悪く後悔をしております。まあ何事にも清めということがございますから、噂などは大臣の意志で消滅させようとすればできるかもしれぬとは見ていますが事実であつたことをきれいに忘れさせることはむずかしいでしょうね。すべて

親から子と次第に人間の価値は落ちていきまして、子は親ほどだれからも尊敬されず、愛されもしないのであると中將を哀れに思っております」

などと言ったあとで源氏は本問題の説明をするのであった。

「大臣にお話ししたいと思ひますことは、大臣の肉身の人を、少し朦朧もうろうとしました初めの関係から私の娘かと思ひまして手もとへ引き取ったのですが、その時には間違いであることも私に聞かせなかつたものですから、したがってくわしく調べもしませんで子供の少ない私ですから、縁があればこそと思ひまして世話をいたしかけましたものの、そう近づいて見ることもしませんで月日が

たったのですが、どうしてお耳にはいったのですか、宮中から御^ご沙汰^{さた}がありましたね、こう仰せられるのです。尚侍^{ないしのかみ}の職が欠員であることは、そのほうの女官が御用をするのにたよる所がなく
て、自然仕事が投げやりになりやすい、それで今お勤めしている
故参^{ないしのすけ}の典侍二人、そのほかにも尚侍になろうとする人たちの多い
中にも資格の十分な人を選び出すのが困難で、たいてい貴族の娘
の声望のある者で、家庭のことに携わらないでいい人というのが
昔から標準になっているのですから、欠点のない完全な資格はな
くても、下の役から勤め上げた年功者の登用される場合はあつて
も、ただ今の典侍にまだそれだけ力がないとすれば、家柄その他

の点で他から選ばなければならないことになるから出仕をさせるようにというお言葉だったのです。私の家の子が相応しないこととも思うわけのものでございせんから、私も宮中の仰せをお受けしようという気になったのでございます。宮仕えというものは適任者であると認められれば役の不足などは考えるべきことではありません。後宮ではなしに宮中の一課をお預かりしていろいろな事務も見なければならぬことは女の最高の理想でないように思う人はあつても、私はそうとも思っておりません。仕事は何であつてもその人格によつてその職がよくも見え、悪くも見えるのであると、私がそんな気になりました時に、娘の年齢のことを聞

きましたことから、これは私の子でなくてあの方のだということがわかったのです。なおお目にかかりましてその点なども明瞭めいりょうにいたしたいと思います。機会がなくてはお目にかかれませんか
ら、おいでを願ってこの話を申し上げようといたしましたところ、あなた様の御病氣のことをお言い出しになりましたとお断わりのお返事をいただいたのですが、それは実際御遠慮申すべきだと思いますものの、こんなふうにおよろしいところを拝見できたのですから、やはり計画どおりに祝いの式をさせたいと思うのです。内大臣にもやはりその節御足労を願いたいと思うのですが、あなた様からいくぶんそのこともおにおわしになったお手紙をお

出してくださいませんか」

と源氏は言うのであった。

「まあそれは思いがけないことでございますね。内大臣の所ではそうした名のりをして来る者は片端から拾うようにしてよく世話をしているようですがね、どうしてあなたの所へ引き取られようとしたのでしょうか。前から何かのお話を聞いていて出て来た人なのですか」

「そうになっていく訳がある人なのです。くわしいことは内大臣のほうがよくわかりになるくらいでしょう。凡俗の中の出来事のように、明らかにすれはますます人が噂うわさに上せたがりそうなこと

と思われまますから、中將にもまだくわしく話してございません。

あなた様も秘密にあそばしてください」

と源氏は注意した。

内大臣のほうでも源氏が三条の宮へ御訪問したことを聞いて、

「簡単な生活をしていらっしやる所では太政大臣の御待遇にお困りになるだろう。前駆の人たちを饗応きやうおうしたり、座敷のお取りもちをする者もはかばかしい者がいないであろう、中將は今日はお客側のお供で来ていられるだろうから」

すぐに子息たちそのほかの殿上役人たちをやるのであった。

「お菓子とか、酒とか、よいようにして差し上げるがいい。私も

行くべきだがかえってたいそうになるだろうから」

などと言っている時に大宮のお手紙が届いたのである。

六条の大臣が見舞いに来てくださったのですが、こちらは人が
少なくともお恥ずかしくもあり、失礼でもありますから、私がわ
ざとお知らせしたというふうでなしに来てくださいますか。

あなたとお逢いあになっってお話しなさいたいこともあるよう
です。

と書かれてあった。何であろう、雲井くもいの雁かりと中将の結婚を許せ
ということなのであろうか、もう長くおいでになれない御病体の
宮がぜひにとそのことをお言いになり、源氏の大臣が謙遜けんそんな言葉

で一言その問題に触れたことをお訴えになれば自分は拒否のしようがない。中將が冷静で、あせって結婚をしようとしないのであることは自分の苦痛なのであるから、いい機会があれば先方に一步譲った形式で許すことにしようと思つた。そしてそれは大宮と源氏が合議されてのことであるに違いないと氣のついた大臣は、それであればいっそう否みよふことであると思われるが、必ずしもそうでないと思つた。こうした時にちよつと反抗的な気持ちの起こるのが内大臣の性格であつた。しかし宮もお手紙をおつかわしになり、源氏の大臣も待つておいでになるらしいから伺わないでは双方へ失礼である。ともかくもその場に

なつて判断をすることにしようと思つて、内大臣は身なりを特に整えて前駆などはわざと簡単にして三条の宮へはいった。子息たちをおおぜい引きつれている大臣は、重々しくも頼もしい人に見えた。背の高さに相応して肥^{ふと}った貫^{かんろく}禄のある姿で歩いて来る様子は大臣らしい大臣であつた。紅紫の指^{さしぬき}貫に桜の色の下襲^{したかさね}の裾^{すそ}を長く引いて、ゆるゆるとした身のとりなしを見せていた。なんというりっぱな姿であらうと見えたが、六条の大臣は桜の色の支^し那^な錦^{にしき}の直衣^{のうし}の下に淡色^{うすいろ}の小袖^{こそで}を幾つも重ねたくつろいだ姿でいて、これはこの上の端麗なものはないと思われるのであつた。自然に美しい光というようなものが添っていて、内大臣の引き繕った姿な

どと比べる性質の美ではなかった。おおぜいの子息たちがそれぞれりっぱになっていた。藤大納言^{とう}、東宮大夫^{たゆう}などという大臣の兄弟たちもいたし、蔵人頭^{くらうどのかみ}、五位の蔵人、近衛^{このえ}の中少将、弁官などは皆一族で、はなやかな十幾人が内大臣を取り巻いていた。その他の役人もついて来ていて、たびたび杯がまわるうちに皆酔いが出て、内大臣の豊かな幸福をだれもだれも話題にした。源氏と内大臣は珍しい会合に昔のことが思い出されて古いころからの話がかわされた。世間で別々に立っている時には競争心というようなものも双方の心に芽ぐむのであるが、一堂に集まってみれば友情のよみがえるのを覚えるばかりであった。隔てのない会話の進ん

でいく間に日が暮れていった。杯がなお人々の間に勧められた。

「伺わないでは済まないのですが、今日来いというよう
なお召しがないものですから、失礼しておりまして、お叱りを受
けそうでなりません」

と内大臣は言った。

「お叱りは私が受けなければならぬと思っ
ていることがたくさ
んあります」

と意味ありげに源氏の言うのを、先刻から考えていた問題であ
ろうと大臣はとって、ただかしこまっていた。

「昔から公人としても私人としてもあなたとほど親しくした人は

私にありません。翅はねを並べるといいうようにして将来は国事に携わろうなどと当時は思ったものですがね、のちになるとお互いに昔の友情としては考えられないようなこともしますからね。しかしそれは区々たることですよ。だいたいの精神は少しも昔と変わっていないのですよ。いつの間にかとった年齢としを思いましても昔のことが恋しくてなりません。お逢あいのできることもまれにしかありませんから、勝手な考えですが、私のように親しい者の所へは微行しのびでもお訪たずねくださればいいと恨めしい気になっている時もあります」

と源氏が言った。

「青年時代を考えてみますと、よくそうした無礼ができたものだと思いますほど親しくさせていただきまして、なんらの隔てもあなた様に持つことがありませんでした。公人といたしましては翹はねを並べるとお言いになりますような価値もない私を、ここまでお引き立てくださいました御好意を忘れるものでございせんが、多い年月の間には我知らずよろしくないことも多くいたしております」

などと大臣は敬意を表しながら言っていた。この話の続きに源氏は玉鬘たまかざらのことを内大臣に告げたのであった。

「何たることでしよう。あまりにうれしい、不思議なお話を承り

ます」

と大臣はひとしきり泣いた。

「ずっと昔ですが、その子の居所が知れなくなりましたことで、何のお話の時でしたか、あまりに悲しくてあなたにお話したこともある気がいたします。今日私もやっと人数ひとかずになつてみますと、散らかっております子供が気になりまして、正直に拾い集めてみますと、またそれぞれ愛情が起こりまして、皆かわいく思われるのですが、私はいつもそうしていながら、あの子供を最も恋しく思い出されるのでした」

この話から、昔の雨夜の話に、いろいろと抽象的に女の品定めしなさだめ

をしたことも二人の間に思い出されて、泣きも笑いもされるのであった。深更になってからいよいよ二人の大臣は別れて帰ることになった。

「こうしてごいっしょになることがありますと、当然なことです
が昔が思い出されて、恋しいことが胸をいっぱいにして、帰って
行く気になれないのですよ」

と言って、あまり泣かない人である源氏も、酔い泣きまじりに
しめっぽいふうを見せた。大宮は葵夫人あおいのことをまた思い出して
おいでになった。昔のはなやかさを幾倍したものかもしれぬ源氏
の勢いを御覧になって、故人が惜しまれてならないのでおありに

なつた。しおしおとお泣きになつた、尼様らしく。

源氏はこうした会見にも中将のことは言い出さなかつた。好意の欠けた処置であると感じた事柄であつたから、自身が口を出すことは見苦しいと思つたのであつた。大臣のほうでは源氏から何とも言わぬ問題について進んで口を切ることもできなかつたのである。その問題が未解決で終わったことは愉快でもなかつた。

「今晚お邸^{やしき}までお送りに参るはのですが、にわかになんかことをいたしますのも人騒がせに存ぜられますから、今日のお礼はまた別の日に参上して申し上げます」

と大臣が言うのを聞いて、それでは宮の御病氣もおよろしいよ

うに拝見するから、きつと申し上げた祝いの日に御足労を煩わしたいということ源氏は頼んで約束ができた。非常に機嫌きげんよく大臣たちは会見を終えて宮邸を出るのであったが、その場にもまたいかめしい光景が現出した。内大臣の供をして来た公達きんだちなどはたまさかの会合が朗らかに終わったのは何の相談があったのである。う、太政大臣は今日もまた以前のように内大臣へ譲ることが何かあったのではないかなどという臆測おくそくをした。玉鬘のことであろうなどとはだれも考えられなかったのである。

内大臣は源氏の話を聞いた瞬間から娘が見たくてならなかった。逢あわないでいることは堪えられないようにも思っているのである

が、今すぐに親らしくふるまうのはいかなものである、自家へ
引き取るほどの熱情を最初に持った源氏の心理を想像すれば、自
分へ渡し放しにはしないであろう、りっぱな夫人たちへの遠慮
で、新しく夫人に加えることはしないが、さすがにそのままで情
人としておくことは、実子として家に入れた最初の態度を裏切る
ことになる世間体をはばかって、自分へ親の権利を譲ったのであ
ろうと思うと、少し遺憾な気も内大臣はするのであったが、自分
の娘を源氏の妻に進めることは不名誉なことであるはずもない、
宮仕えをさせると源氏が言い出すことになれば女御によごとその母など
は不快に思うであろうが、ともかくも源氏の定めることに随したがうよ

りほかはないと、こんなことをいろいろと大臣は思った。これは二月の初めのことである。十六日からは彼岸になつて、その日は吉日でもあつたから、この近くにこれ以上の日がないとも暦の博士^せからの報告もあつて、玉鬘^{たまかざら}の裳着^{もぎ}の日を源氏はそれに決めて、玉鬘へは大臣に知らせた話もして、その式についての心得も教えた。源氏のあたたかい親切は、親であつてもこれほどの愛は持つてくれないであろうと玉鬘にはうれしく思われたが、しかも実父に逢う日の来たことを何物にも代えられないように喜んだ。その後、源氏は中将へもほんとうのことを話して聞かせた。不思議なことであると思つたが、中将にはもつともだと合点されることも

あつた。失恋した雲井くもいの雁かりよりも美しいように思われた玉鬘たまむすめの顔を、なお驚きに呆然ぼうぜんとした気持ちの中にも考えて、気がつかなく
かつたと思わぬ損失を受けたような心持ちにもなつた。しかしこ
れはふまじめな考えである、恋人の姉妹ではないかと反省した中
将はまれな正直な人と言ふべきである。

十六日の朝に三条の宮からそつと使いが来て、裳着もぎの姫君への
贈り物の櫛くしの箱などを、にわかなことではあつたがきれいにでき
たのを下された。

手紙を私がおあげするのも不吉に思いにならぬかと思い、遠
慮りょをしたほうがよろしいとは考えるのですが、大人おとなにおなりに

なる初めのお祝いを言わせてもらうことだけは許していただ
るかと思つたのです。あなたのお身の上の複雑な事情も私は聞
いていますことを言つてよろしいでしょうか、許していただ
ければいいと思います。

ふたかたに言ひもてゆけば玉櫛たまくしげ笥きわがみはなれぬかけごなり
けり

と老人の慄ふるえた字でお書きになつたのを、ちようど源氏も玉鬘
のほうにいて、いろいろな式のことの指図さしずをしていた時であつた

から拝見した。

「昔風なお手紙だけれど、お気の毒ですよ。このお字ね。昔は上手な方だったのだけれど、こんなことまでもおいおい悪くなってくるものらしい。おかしいほど慄えている」

と言って、何度も源氏は読み返しながら、

「よくもこんなに玉櫛笥にとらわれた歌が詠めたものだ。三十一文字の中にほかのことは少ししかありませんからね」

そつと源氏は笑っていた。中宮から白い裳、唐衣、小袖、髪上げの具などを美しくそろえて、そのほか、こうした場合の贈り物に必ず添うことになっている香の壺には支那の薫香のすぐれたの

を入れてお持たせになった。六条院の諸夫人も皆それぞれの好みで姫君の衣裳いしやうに女房用の櫛や扇までも多く添えて贈った。劣り勝まさりもない品々であつた。聡明そうめいな人たちが他と競争するつもりで作りととのえた物であるから、皆目と心を楽しませる物ばかりであつた。東の院の人たちも裳着もぎの式のあることを聞いていたが、贈り物を差し出てすることを遠慮していた中で、末摘花夫人すえつむはなは、形式的に何でもしないではいられぬ昔風な性質から、これをよそのことにしては置かれないと正式に贈り物をこしらえた。愚かしい親切である。青鈍色あおにびの細長、落栗色おちぐりとか何とかいって昔の女が珍重した色合いの袴一具はかま、紫が白けて見える霰地あられじの小桂こうちぎ、これを

よい衣裳箱に入れて、たいそうな包み方もして玉鬘たまかざらへ贈つて来た。手紙には、

ご存じになるはずもない私ですから、お恥ずかしいのですが、こうしたおめでたいことは傍観してられない気になりました。つまらない物ですが女房にでもお与えください。

とおおように書かれてあった。源氏はその来ているのを見て気まづく思つて例のよけいなことをする人だと顔が赤くなつた。

「これは前代の遺物のような人ですよ。こんなみじめな人は引き込んだままにしているほうがいいのに、おりおりこうして恥をかきに來られるのだ」

と言つて、また、

「しかし返事はしておあげなさい。侮辱されたと思うでしょう。親王さんが御秘蔵になすったお嬢さんだと思つと、軽蔑^{けいべつ}してしまふことのできない、哀れな氣のする人ですよ」

とも言つのであつた。小桂の袖の所にいつも変わらぬ末摘花の歌が置いてあつた。

わが身こそうらみられけれ唐^{から}ごろも君が袂^{たもと}に馴^なれずと思へば

字は昔もまずい人であつたが、小さく縮かんだものになつて、

紙へ強く押しつけるように書かれてあるのであった。源氏は不快ではあったが、また滑稽にも思われて破顔していた。

「どんな恰好かっこうをしてこの歌を詠よんだろう、昔の気力だけもなくなっているのだから、大騒ぎだったろう」

とおかしがっていた。

「この返事は忙しくても私がする」

と源氏は言つて、

不思議な、常人の思い寄らないようなことはやはりなさらないでもいいことだったのですよ。

と反感を見せて書いた。また、

からごろもまた唐衣からごろも返す返すも唐衣なる

と書いて、まじめ顔で、

「あの人が好きな言葉なのですから、こう作ったのです」

こんなことを言って玉鬘に見せた。姫君は派手^{はで}に笑いながらも、

「お気の毒でございます。嘲弄^{ちやうろう}をなさるようになるではございませんか」

と困ったように言っていた。こんな戯れも源氏はするのである。

内大臣は重々しくふるまうのが好きで、裳着の腰結こしゆい役を引き受けたにしても、定刻より早く出掛けるようなことをしないはずの人であるが、玉鬘のことを聞いた時から、一刻も早く逢いたいという父の愛が動いてとまらぬ気持ちから、今日は早く出て来た。行き届いた上にも行き届かせての祝い日の設けが六条院にできていた。よくよくの好意がなければこれほどまでにできるものではないと内大臣はありがたくも思いながらまた風変わりなことに[出](#)あっている気もした。夜の十時に式場へ案内されたのである。形式どおりの事のほかに、特にこの座敷における内大臣の席に華美な設けがされてあつて、数々の肴さかなの台が出た。燈火を普通

の裳着^{もぎ}の式場などよりもいささか明るくしてあつて、父がめぐり合つて見る子の顔のわかる程度にさせてあるのであつた。よく見たいと大臣は思いながらも式場でのごことで、単に裳^もの紐^{ひも}を結んでやる以上のこともできないが、万感が胸に迫るふうであつた。源氏が、

「今日はまだ歴史を外部に知らせないことでございますから、普通の作法におとめください」

と注意した。

「実際何とも申し上げようがありません」

杯の進められた時に、また内大臣は、

「無限の感謝を受けていただかなければなりません。しかしながらまた今日までお知らせくさいませんでした恨めしさがそれに添うのもやむをえないこととお許しください」

と言った。

うらめしや沖つ玉藻たまもをかつくまで磯隠いそれける海人あまの心よ

こう言う大臣に悲しいふうがあつた。玉鬘たまかざりは父のこの歌に答えることが、式場のことであつたし、晴れがましくてできないのを見て、源氏は、

「寄^よ辺^るなみかかる渚^{なぎさ}にうち寄せて海人も尋ねぬ藻屑^{もくづ}とぞ見し

御無理なお恨みです」

代わってこう言った。

「もつともです」

と内大臣は苦笑するほかはなかった。こうして裳着の式は終わったのである。親王がた以下の来賓も多かったから、求婚者たちも多く混じっているわけで、大臣が饗^{きやう}応^{おう}の席へ急に帰って来ないのはどういうわけかと疑問も起こしていた。内大臣の子息の頭^{とう}の中將と弁^{べん}の少將だけはもう真相を聞いていた。知らずに恋をした

ことを思つて、恥じもしたし、また精神的恋愛にとどまつたことは幸せであつたとも思つた。

弁は、

「求婚者になろうとして、もう一步を踏み出さなかつたのだから自分はよかつた」

と兄にささやいた。

「太政大臣はこんな趣味がおりになるのだろうか。中宮と同じようにお扱いになる気だろうか」

とまた一人が言つたりしていることも源氏には想像されなくもなかつたが、内大臣に、

「当分はこのことを慎重にしていきたいと思います。世間の批難などの集まってこないようにしたいと思うのです。普通の人なら何でもないことでしょうが、あなたのほうでも私のほうでもいろいろに言い騒がれることは迷惑することですから、いつとなく事実として人が信じるようになるのがいいでしょう」

と言っていた。

「あなたの御意志に従います。こんなにまで御実子のように愛してくださいましたことも前生に深い因縁のあることだろうと思います」

腰結い役への贈り物、引き出物、纏頭てんとうに差等をつけて配られる

品々にはきまつた式があることではあるが、それ以上に派手はでな物を源氏は出した。大宮の御病氣が一時支障になつていた式でもあつたから、はなやかな音楽の遊びを行なうことはなかつたのである。

兵部卿ひょうぶきやうの宮は、もう成年式も済んだ以上、何も結婚を延ばす理由はないとお言いになつて、熱心に源氏の同意をお求めになるのであつたが、

「陛下から宮仕えにお召しになつたのを、一度御辞退申し上げたあとで、また仰せがありますから、ともかくも尚侍ないしのかみを勤めさせることにしまして、その上でまた結婚のことを考えたいと思いま

す」

と源氏は挨拶あいさつをしていた。父の大臣はほのかに見た玉鬘たまかざらの顔を、なおもつとはつきり見ることができないであろうか、容貌ようぼうの悪い娘であれば、あれほど大騒ぎをして源氏は大事がつてはくれまいなどと思つて、まだ見なかった日よりもいつそう恋しがつていた。今になつてはじめて夢占いの言葉が事実合つたことも思われたのである。最愛の娘である女御にょごにだけ大臣は玉鬘のことをくわしく話したのであつた。

世間でしばらくこのことを風評させまいと両家の人々は注意していたのであるが、口さがないのは世間で、いつとなく評判にし

てしまったのを、例の蓮葉はすつばな大臣の娘が聞いて、女御の居間に頭中將や少將などの来ている時に出て来て言った。

「殿様はまたお嬢様を発見なすったのですってね。しあわせね、両方のお家うちで、大事がられるなんて。そして何ですってね。その人もいいお母様から生まれたのではないのですってね」

と露骨なことを言うのを、女御は片腹痛く思っ何とも言わない。中將が、

「大事がられる訳があるから大事がられるのでしよう。いったいあなたはだれから聞いてそんなことを不謹慎に言うのですか。おしゃべりな女房が聞いてしまうじゃありませんか」

と言った。

「あなたは黙っていらっしやい。私は皆知っています。その人は尚侍ないしのかみになるのです。私が女御さんの所へ来ているのは、そんなふうに引き立てていただけるかと思ってですよ。普通の女房だつてしやしない用事までもして、私は働いています。女御さんは薄情です」

と令嬢は恨むのである。

「尚侍が欠員になれば僕たちがそれになりたいと思っっているのに。ひどいね、この人がなりたがるなんて」

と兄たちがからかって言うと、腹をたてて、

「りっぱな兄弟がたの中へ、つまらない妹などははいって来るものじゃない。中将さんは薄情です。よけいなことをして私を家へうちつれておいでになって、そして軽蔑けいべつばかりなさるのだもの、平凡な人間ではごいっしょに混じってられないお家だわ。たいへんなたいへんなりっぱな皆さんだから」

次第にあとへ身体からだを引いて、こちらをにらんでいるのが、子供らしくはあるが、意地悪そうに目じりがつり上がっているのである。中将はこんなことを見ても自身の失敗が恥ずかしくてまじめに黙っていた。弁の少将が、

「そんなふうにあなたは論理を立てることができる人なのですか

ら、女御さんも尊重なさるでしょうよ。心を静めてじっと念じて
いれば、岩だって沫雪あわゆきのようにすることもできるのですから、あ
なたの志望だって実現できることもありますよ」

と微笑しながら言っていた。中将は、

「腹をたててあなたが天あまの岩戸の中へはいつてしまえばそれが最
もいいですよ」

と言って立って行った。令嬢はほろほろと涙をこぼしながら泣
いていた。

「あの方たちはあんなに薄情なことをお言いになるのですが、あ
なただけは私を愛してくださいますから、私はよく御用をしてあ

げます」

と言つて、小まめに下の童女しもさえしかねるような用にも走り歩いて、一所懸命に勤めては、

「尚侍に私を推薦してください」

と令嬢は女御を責めるのであつた。どんな気持ちでそればかりを望むのであらうと女御はあきれて何とも言ふことができない。

この話を内大臣が聞いて、おもしろそうに笑いながら、女御の所へ来ていた時に、

「どこにいるかね、近江おうみの君、ちよつとこちらへ」と呼んだ。

「はい」

高く返辞をして近江の君は出て来た。

「あなたはよく精勤するね、役人にいいだろうね。尚侍にあんたがなりたいということななぜ早く私に言わなかったのかね」

大臣はまじめ顔に言うのである。近江の君は喜んだ。

「そう申し上げたかったのでございますが、女御さんのほうから間接にお聞きくださるでしょうと御信頼しきっていたのですが、おなりになる人が別においでになることを承りまして、私は夢の中だけで金持ちになっていたという気がいたしましてね、胸の上^{といき}に手を置いて吐息ばかりをつく状態でございました」

とても早口にべらべらと言う。大臣はふき出してしまいそうになるのをみずからおさえて、

「つまり遠慮深い癖が禍わざわいしたのだね。私に言えばほかの希望者よりも先に、陛下へお願いしたのだったがね。太政大臣の令嬢がどんなにりっぱな人であっても、私がぜひとお願いすれば勅許がないわけはなかったろうに、惜しいことをしたね。しかし今からでもいいから自己の推薦状を美辞麗句で書いて出せばいい。巧みな長歌などですれば陛下のお目にきつととまるだろう。人情味のある方だからね」

とからかっていた。親がすべきことではないが。

「和歌はどうやらこうやら作りますが、長い自身の推薦文のようなもの、お父様から書いてお出しくださいましたほうがと思います。二人でお願いする形になって、お父様のお蔭かげがこうむられます」

両手を擦すり合わせながら近江の君は言っていた。几帳きちようの後ろなどで聞いている女房は笑いたい時に笑われぬ苦しみをなめていた。我慢がまん性しょうのない人らは立って行ってしまった。女御も顔を赤くして醜いことだと思っているのであった。内大臣は、

「気分の悪い時には近江の君と逢あうのがよい。滑稽こっけいを見せて紛らせてくれる」

とこんなことを言って笑いぐさにしているのであるが、世間の人は内大臣が恥ずかしさをごまかす意味でそんな態度もとるのであると言っていた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
